

縄文時代の大形住居について（その2）

——定義と機能に関する統論——

小 川 望

はじめに

先に『縄文時代の「大形住居」について（その1）』（以下、前稿と呼ぶ）と題する論考において、大形住居の定義と機能に考察を加え、それが「単一もしくは複数の文化事象」であったとした上で、「共食の場」としての機能が想定し得るとの考え方を示した（小川 1985）。その際、大形住居の時間的、空間的様相の検討についてはその定義、機能とも関わる問題でもあり、統論する予定であったが、久しくその責を果たし得ないでいた。その間、大形住居に関する論考や前稿に対する意見が示され、あるいは新たな資料の発見・報告もいくつか見られた。このほか、ここでは具体的には触れ得ないが、多くの概説書、啓蒙書において縄文時代の社会を解明する手掛りとして大形住居を取り上げるようになって来ている。

本稿は特に前稿に対して住居の形態上の分類から積極的な意見を呈示された菅谷通保氏、分類・機能推定において隔室構造をはじめとする諸様相に言及された武藤康弘氏の論考を得て浮き彫りになった、大形住居の分類や内的構造に関する議論を軸に筆者の立場を明らかにし、今後の検討へ向けての整理を行なうものである。

1. “特殊”住居としての大形住居

筆者は前稿でその用語用字にも論を及ぼした上で、「大形（大型）住居」「長方形大形家屋址」等と呼ばれ、規模の大なる事をもって論ぜられる住居址は、なんらかの規準、特徴によって常に律せられるものとは限らない。それを予め設けた先験的な規準、特徴で弁別するなら、その結果得られるであろう大形住居の特質は限定されてしまい、同義反復に陥ってしまおうと指摘し、ひとまず「単に大規模なる事をもって住居址全体の中から区別された単一もしくは複数の文化事象」（P. 191）としての「大形住居」を措定している（小川 1985）。

一方武藤氏は「特殊住居論」として柄鏡型住居とともに大形住居を論じ、「ここで言う特殊とは、考古学的には、発掘された住居址の内部構造や集落内立地、出土遺物などが、他の通常の住居址と異なっている場合である。」（P. 75）と述べ、大形住居にⅠ類～Ⅵ類の四つの類型を見出している（武藤 1985）。

これらを含めたこれまでの研究における大形住居の捉え方に対して、菅谷氏から以下のような疑義が呈示された。

氏は「特殊住居論」を「通常」の住居と異なる機能が予想される（傍点引用者）事例を取り上げて機能を堆定し、その特殊性を縄文時代の文化・社会観に投影させる意図を持つもの」と一括し、「しかし、住居が機能的に区別できるなら、同時に＜形態＞として区別すべきではないか。」「対象の弁別・分類、さらに機能の推定においても「通常」の住居の規定のないまま特殊性を述べる点は肯定し難い。」と述べ、「特殊住居論が各研究者の先験的に認める特殊例のみを対象としている点が、とりも直さず研究自体の根本的な問題なのである。」と論断している（菅谷 1987; p.155）。

さらに前稿に言及して、「特に問題なのは、氏（小川…引用者註）の「大形住居」が「通常の住居が一群を形成する」のに対し「全体の中からその範囲に含まれないもの」とする点である。BでなければCであるという論理だが、全体AはBとCからのみ成る、という前提と論証が必要である。」との指摘を行なっている（p.162）。

これらは、何をもって「特殊」とし、何をもって「通常」とするかという認識に関するものであり、氏の「特殊住居論批判」の根底にも関わる重要な観点であると思われる。

結論から言えば、菅谷氏においては「特殊」があらかじめ機能を指示するものであるのに対し、その批判の対象となっている研究の多くにおいては、住居址全体の中で特殊な（と感じられる）ものとして「特殊」の語が用いられている、という相違に基づいた（意図的であるかどうかは別として）誤解と考えられる。この点は先に引用した「通常の住居の規定がないまま」というくだりにおいて、「通常」の住居と異なる機能が予想される事例を取り上げて機能を堆定し」という特殊住居論の規定において、さらに「住居が機能的に区別できるなら…」という批判において如実に表れている。すなわち機能が特殊と考えるのか、規模などの属性が特殊と考えるのかの違いが同列に論じられているのである。

これまでの大形住居に関する議論では、その機能の推定を行なうに先立ち、「特異なもの」としての大形住居の規定を行っており、この段階ではその結果として抽出される大形の住居の機能が通常の住居と一線を画し得るものであることは前提されていない。ただし、大形住居を通常の住居から弁別する指標や規準についての議論の中には、高橋与右エ門氏の「炉跡や遺物の種類やその出土状況、そして住居跡内の施設などの内的条件が小規模の住居跡と違う」（高橋与 1983）というような、機能の相違をも（おそらく無意識の内に）前提としているものが見られ、これについては筆者が「結論を先取りし過ぎている」と同義反復に陥る危険を指摘しているのである。これに対し、菅谷氏は大形住居を一旦通常の住居と同一のカテゴリーに引き戻し、その上でその形態的特徴から検討することを唱えているわけであろうが、ここには大形住居の存在やこれをめぐる議論においてより明らかになってきた、住居址全体の類別と機能に関する問題が存在する。つまりこれまで柄鏡型住居および敷石住居の形でのみ得られていた、「住居」址の機能の多元的である可能性に関する議論が、大形住居をめぐってより鮮明な形で表れてきたのであり、そういう意味では氏が指

摘しているのは、全体を規模と形態のどちらから先に（上位に）分類して行くかといういわば手続きの問題に過ぎないことになる。

こうした論点において、前稿ではどのような議論を行なっているのかを確認しておく、「大形住居がその規模において一つの群を形成するとあらかじめ前提することは妥当でない」ので、文化事象の持つ規範という観点から「通常の住居が一定の規格をもっていたと考え」ればその規模において「むしろ通常の住居が一つの群を形成すると考える方が妥当であろう」として、「全体の中からその範囲に含まれないものをひとまず大形住居と考え」たのである。つまり、前稿では「これから検討を加えていく対象を規定するため」に設定した便宜的範囲によって全住居址を区分したものであり、いわば $[A = B + C]$ ではなくて $[A = B + \overline{B}]$ 、つまり通常の住居と認定し得る範囲の設定によって、認定し得ないものの範囲を逆に設定して、ひとまずこれを「大形住居」として措定したのである。したがって当然のことながらこの「大形住居」は通常のものとは言えない規模を持った大形の住居址の集合であって、その機能が通常の住居と同様居住にある可能性を否定するものではないし、また通常の住居に対置し得るような一つの文化事象を意味するものでもない。

そういう意味において「単一もしくは複数の文化事象」としたのである。

こうした形で具体的にその設定の手続きを明らかにしていなくても、これまでになされた議論における、ある「特殊な」住居の一群にどのような機能を求め、あるいは大形であるという「特殊性」をいかに考えて行くか、また大形住居をいかに分類し位置付けて行くかといった議論を整理して見ると、それぞれの研究者が持つ大形住居に対するイメージと別ち難く結びついていることが明らかになってくる。

筆者の議論は前稿においてはそれを空間的な要素による分析に負うところが大きいであろうという指摘に留まって、具体的に呈示していないが、大形住居の平面形と炉の形態における時期的な相違を変遷と考え、これを通常の住居におけるそれと比較してみることによって一定の「ずれ」というものが見出し得るとの指摘を行ない、これによって大形住居が通常の住居と対置し得る一つの文化事象としての把握が可能であろうとの傍証が得られたと考えたが、後述する菅谷氏の指摘にもあるように、いささか結論を急ぎ過ぎたようである。また、後に改めて触れるが、前稿より後に明らかになった資料も、これを単一の文化事象とする考え方に対して否定的であるように見える。

一方菅谷氏は、形態分類上の相違をただちに機能の相違と等価に考えているように思われる。

このことは、さらに「形態」「型式」などの語とその機能に関する議論においても表れているが、これについては次章にて論じることにする。

2. 大形住居とその類別

大形住居の機能と弁別に関する議論と不可分の問題として大形住居の類別の問題がある。菅谷氏のような議論を別にすれば、これまでに大形住居について述べた論考の多くが1)まず大形住居をなんらかの形で住居址全体の中から抽出し、2)その中を類別し、その時空間的あり方を検討し、ある

いは分類の単位となるものそれぞれに対して機能を求めている。

1)については前稿および前節で述べたので、以下2)に関する部分について概観する。

中村良幸氏は大形住居が「竪穴式のもの」と「掘立柱状遺構」の2つに「系統的に」分けられるとし、さらに竪穴式のものに形態と炉址との対応とその時期的在り方から5つの「類」の存在を認めている。すなわち、早期の（隅丸）長方形、長楕円形で主たる炉址がないもの、前期前半の隅丸方形、隅丸台形で主たる炉址が複数並列に並ぶもの、中期中葉の（隅丸）長方形、長楕円形で主たる炉址が1カ所しかないもの、前期前半～中期末葉の（隅丸）長方形、長楕円形で主たる炉址が複数直列に並ぶもの、および中期末葉～晩期の円形で主たる炉址が1カ所しかないものの5つである。そしてこのうち第3、第4のものを一つの「グループ」として「長方形大形住居址」と呼び、第5のものを「円形大形住居址」と呼んでそれぞれ検討を加えている。その機能については、前者に渡辺誠氏による「雪国の共同作業所」を考え、後者には「集会所か祭祀的な施設」を考え得るとしている。また掘立柱状遺構については「祭祀的な様相を強くもつもの」としている（中村 1982）。

高橋文夫氏をはじめとする岩手県の研究者は、主に炉のありかたに注目し、これに規模や出現時期を加味して、大形住居に「大型住居第1系列」、「大型住居第2系列」の二者を見出している。前者は「長方形あるいは長楕円形の平面形をもち、長軸線上に複数の炉が間隔をおいて並ぶありかたを示す規模の大きな住居址」であり、後者は「平面形は長方形や長楕円・台形で、…炉はすべて地床炉で3基以上が長軸線をはさんで対（単独の場合、1基は単独）になる。…住居形態の共通性、とりわけ特異な炉のありかたは床面積よりも識別形質として上位にあると考えられ」というものである。これらは異なった文化事象として扱われているが、それぞれの機能については言及されていない（三浦ほか 1985）。

高橋与右エ門氏はまずその平面形から、短径と長径の比率が1.3～1.45と寸づまりの長方形であるA型、短径と長径の比率が1.5以上でA型より細長い長方形や長楕円形であるB型、短径と長径の比率が1.4以下のズングリムックリの形状を示す楕円形と円形のC型の3型態に分類し、その各々についての時期的な現われ方や炉、柱穴配置を検討している。さらにB型とC型については、短径と長径の比率からさらに2つに分けられる可能性を指摘している。ただし機能についてはA～Cのいずれについても言及はない（高橋与 1983）。

武藤氏は「縄文時代の大形住居址の構造や立地の在り方は多様であり、単一の機能で普遍的に解釈することは困難であると思われる」ことから、大形住居をその「家屋構造から」4つの「類型」に分類している。「長軸15m以上の規模と長方形の平面形をもち、内部構造として4基以上の炉と隔室構造の痕跡（間仕切りピット）が認められるもの」をⅠ類、「長軸15m前後の規模と長楕円形の平面形をもち、内部構造として定位置的炉が1基のみ設置されるもの」をⅡ類、「長軸15m以上の規模と長方形の平面形をもち、柱穴以外の内部構造が全く認められないもの」をⅢ類、「直径15m前後の規模と円形の平面形をもち、柱穴以外の内部構造と定位置的炉が明確に認められないもの」をⅣ類とする。そしてⅠ類には「炉を一つの居住単位として」見ることによってこれに「冬季間の共

同居住家屋」の機能を、Ⅱ—Ⅳ類には、「通常的な居住施設以外の機能、たとえば集落構成員の共同施設等の機能」を求めている（武藤 1985）。このうちⅠ類においては、大形住居址内の小柱穴から間仕切りの存在をも指摘して、それを共同住宅の性格を裏付けるものとしているが、隔室構造の痕跡であるという間仕切りピットが具体的にどのようなものをさしているのかが明らかにされていない。したがって15m以上の規模を持っていても必ずしも住居址内の空間を「炉を中心とする空間」に分割するような柱穴が認められないような例（たとえば青森県近野遺跡8号住居）はどのように分類されるかが明らかでない。

一方その対象は大形住居に限定されるものではないが、菅谷氏も「炉空間」なるものを設定し、「個別施設の組み合わせで成り立つ竪穴住居を、炉空間の構成に注目して弁別」することによって大形住居を含めた住居址全般に3つの「形態」の存在を認めている。すなわち「個別施設、炉空間ともに一単位である」＜単純単位形態＞、「炉と炉空間とが複数存在する」＜複合単位形態＞、および「複数の炉が計画的に配置されながら、炉空間を形成せず、炉が屋内の生活の中心にならないと思われる」＜非単位形態＞とである。その機能についての明確な定義を欠くが、論末で氏の述べているところをそのまま引くと、「＜単純形態＞は、最小単位の一集団を収容する施設」すなわち住居であり、「＜複合形態＞は、複数の集団を最少単位としての独立性を保ったまま、同時に収容する施設」すなわち共同居住家屋であり、「＜非単位形態＞は不特定多数成員の誰であっても、その内部にることによって他者と区別されない、不特定多数の人々に利用された共用的な施設」（P.164）であるという。

菅谷氏の議論については後に詳しく述べることにして、ここまでに見て来たそれぞれの論考における、類別とその機能について整理してみよう。これは前稿において筆者が述べた「単一もしくは複数の文化事象」としての認定と深く関わるものである。

大形住居の類別と機能に関する考え方は、これを単一の文化事象とし、その中に見られる属性の差異が時期差、地域差などに基づくものとして内的に分類されとする見方と、これを複数の文化事象と捉え、属性などによる分類はその文化事象の間を分けるものであるとする見方とに二分される。

まず、前者は大形住居を単一のかつ独立した機能を持った文化事象とする見方である。この見方においては、大形住居をいくつかに類別していても、そのそれぞれは時期的変遷や地域的変異の各典型を示すものと位置付けられることになる。そういう点から見れば渡辺誠氏や、その機能は明示していないものの高橋与右エ門氏の考え方がこれにあたるものといえようし、前稿における筆者の最終的な立場もこれにあたる。

これに対して、後者は大形住居が複数の機能を持つ文化事象の集合とする見方である。これは上を除いた残りであるが、その複数の機能の内に「居住」が含まれているものとそうでないものがある。その「居住」という機能が「通常」の住居址と何ら変わるところがないとする場合においては、「単一で独立しない」場合とともにむしろ大形住居の弁別の問題となり、ここでの議論の対象と

ならない。したがって「居住」という機能を考えたものは、少なくとも「通常」の住居におけるものとは異なった「居住」の形態を、大形住居の少なくとも一部に見出していることになる。言い換えれば、大形住居の機能をめぐる議論において単一にせよ複数のうちの一部にせよ「居住」という機能をもった文化事象とするものはそのほとんどが「特殊な」形態の居住を論じていることになる。具体的には武藤氏のⅠ類であり、菅谷氏の〈複合単位形態〉もほぼこれにあたるものといえよう。

こうした二元的な居住形態について武藤氏は、「立地上、貯蔵穴群と隣接すること、断続的居住をおこなったと考えられる建て替えの痕跡が多くの例に認められること、分布が多雪地帯と重なること等を考え合わせると、冬季間における共同居住家屋として機能した可能性が高い」（P.76）と述べ、季節的なものとしている。これに対し菅谷氏は〈単純形態〉を最小単位の一集団を収容する施設とし、〈複合形態〉を複数の集団を同時に収容する施設とするだけで、この両者の存在する理由を具体的には論じていない。しかしむしろ問題となるのはこうした結論をもとめた手続きそのものである。

菅谷氏の議論においては各々の「形態」がその機能とどのような位置関係を占めているのかについての議論はいささか不明確であるが、「炉空間」というものをキーワードとして理解していかなければならないように思われる。

この炉空間については、「“掘り方”，“炉”，“支柱穴”，“出入口”等（「個別施設」…引用者註）が、それぞれ特定の機能を持ちながら一個の住居として組み立てられ、居住施設としての住居の機能を形づくっている。（略）通常、一棟の竪穴住居において、各個別施設は一単位のみが用いられている。（略）炉を中心として支柱穴に囲まれた空間は、住居内部の中核的な居住空間として機能すると思われる。筆者はこれを〈炉空間〉と仮称しているが、炉空間も通常一単位である。」と述べ、続けて「個別施設、炉空間ともに一単位であるものを〈単純単位形態〉と呼んで、住居および同一の技術的背景を持つ構築物の基本的な形態と考えておく。」とする（P.159—160）。ここで注意しておくべきことは「炉空間」そのものが「通常の」住居の観察から抽出された作業仮設として設定され、それ故その空間そのものに既に居住という機能が付与されているということである。したがって〈単純単位形態〉にせよ、それが複数組み合わせられたものとされる〈複合単位形態〉にせよ、その機能は自動的に居住であることになってしまう。つまり、前提その物がすでに結論を含んでいるのであるから、その前提から得られる結論はあらかじめ定まっていたものであり、何も論証していないことに等しいのである。

さらに言うなら、炉空間が居住を表象する単位として認定し得るものであるとしても、それ以外の空間的形態が居住という機能を表象し得ないということにはならない。支柱穴を欠くなど、「炉空間」をもたない住居にも居住という機能が考えられるように。それにもかかわらず「〈非単位形態〉が炉空間を形成しないのは、一つの単位として認める形で人間を収容したものでないからであると推定できる」とするのは論理が倒錯していると言わざるを得ないし、さらにこれを根拠として「即ち、〈非単位形態〉は（略）不特定多数の人々に利用された共用的な施設である」との結論を

導くことは誤りであると言わざるをえない。

こうした問題については、菅谷氏の論考に限らずまだ論ずべきところがあるけれども、それは他日を期すことにして、ここでこれらのそれぞれの類別の各々の単位となる分類上のグループがどのような性格のものであるのかについて検討を加えてみたい。ただし、それぞれの形態分類上の単位がどのような対応関係を示しているかについては菅谷氏が示しているので、ここではそれぞれに推定される機能という点からそれらが筆者の言う「文化事象」とどのような位置関係を占めるのかという側面を中心に目を向けることにしよう。

その前に一つ確認しておかねばならないことは、検討の対象の弁別とは別に、分類体系全体の取り扱い範囲が均等ではないという問題が存在するということである。

これは特に掘立柱状遺構などと呼ばれる、大形であるが柱穴のみからなる遺構の扱いにおいて鮮明に現われている。例えば、この遺構は武藤氏においては、Ⅲ類として他の堅穴を持つものと同列に扱われ、分類の体系の中に含まれており、中村氏においては先に見たように一応検討対象の中に所属してはいても「系統的に」分けられるものとして、堅穴式のものとは同列には扱われていない。さらに、小川においてはこれを検討の対象としておらず、また中にはこれに全く触れていない論考すら見られる。

また、ほぼ中央に炉を一基のみ持つ円形の堅穴式の例は、小川を含む多くの論考においては長方形、楕円形を基調とする平面形の例とほぼ同等に扱われているが、中村氏においては堅穴式の例の中で「長方形大形住居址」に對置されるものとして位置付けられており、さらに武藤氏の論考においてはその分類体系の中にこれが所属すべき分類項目を見出し得ない。

こうした問題は、おのおのの研究者の持つ住居に対する考え方や、その機能に関する全的な把握の仕方にもかかわることであって、一概に是非を問うことは妥当とは言えないが、少なくとも大形住居を、「大形」の「住居」として論じる以上、自らの分類体系への所属の可否を含め検討の対象とされるべきではないかと考える。

さて、菅谷氏の分類体系はここまで見てきたようにその基準を大きく異にするものであるので、後者の円形の例については特に論ずるところを持たないが、前者の掘立柱状遺構に対しては「堅穴住居という形態に対して区別される平地住居、もしくは高床住居いずれかの形態である」と述べ、その論拠を明らかにしないまま堅穴式とは異なった形態の住居であるとしている。形態が違うという指摘はもとより当然とも言えようが、むしろここで問題となるのは、「形態」と言う語である。

氏は、別の場所で「氏（小川…引用者註）は当初「単一もしくは複数の文化事象」なしながら、論証のないまま単一の事象として扱っている。これが認められないのは、先に示したように三つの形態の存在から明らかであろう（傍点引用者）」（P.162）とする指摘を行なっているが、ここに氏の「形態」に対する認識の一端が表れているようである。筆者が前稿において大形住居を論証のないまま単一の文化事象としているという指摘はもっともであり、結論を急ぎすぎたと反省しているが、これを論じるに、三つの形態の存在からこれが否定し得るという点は理解し難い。少なくとも

ここを見る限りにおいて、氏は形態の差異をもって機能の差異の論拠としているようであるが、形態にみられる差異が、文化事象の差異と一対一に対応するものではあるまい。

例えば形態は異なるが機能は同一であるといった例については「形式」と「型式」、時期差、地域差、系統差などの語彙を持ち出すまでもなく明瞭なことであろう。

また、機能は異なるが形態が同一であるということも、当然ありうるものとして考えておかなくてはならないことであり、さもなくば例えば民族誌的事例と考古資料上の事例が、単にその形態的な類似性や同一性から一元的に解釈し得ることになってしまう。

この点に関して菅谷氏の論考においては具体的な議論や定義を欠くが、「形態」は機能の差に対応するという点では「型式」の上位に位置するものと考えられる。しかし氏の住居「型式」に関する別の論稿を参照する限りでは形態は、型式設定の前段階として措定されるものであり、これが整理統合されて型式が認定されるようになるものであるとも理解される（菅谷 1985）。

こうした機能と分類体系との対応関係に関する明確な視点を欠くためであろうか、氏はその論考の末尾付近において「＜単純形態＞」に見られる規模の差は、収容する集団の質的な相違の反映されたものと言えるが、同一構成の家族が必要とする面積は住居型式によって異なる可能性があるから、型式を設定した上で量から質への転換点を求めて行かねばならない。」としている。

規模の差が集団の質的な相違に反映していると考えるからこそ特殊住居としての大形住居に関する議論が展開されて来たのであり、上にも論じたように「型式」の設定は機能の推定や同定に先行され得るものではない。また、形態の整理を規模に関する議論に先行させよという主張であればこれは手続き上の議論に過ぎず、その求めるものは同一のものということになる。

氏の住居型式に関する検討が注目されるだけにその整理が期待されるところではある。

3. その他のいくつかの議論

ここまで菅谷氏の批判を中心に、大形住居の定義弁別と類別に関する議論を検討して来た。

筆者の立場からこれらの問題も含め具体的な検討に移る前に、氏の批判のその他の論点に簡略に触れておこう。

1) 住居内の炉の評価をめぐって

先にその問題点に触れはしたものの菅谷氏の呈示された「炉空間」の概念は、住居址の内的分析を行なう上では極めて重要な指摘を含んでいる。武藤氏も「炉を中心とした」隔室構造を設定しているように、やはり炉を中心とする空間の重要性に注目されている。

縄文時代に限らず、火や炉というものがその生活全体の中で占める実際的な側面に止まらず、象徴的な価値を付与されていたであろうことは、民族誌や民俗学的研究を参照すれば容易に指摘し得るところであろうが、しかしここからただちに「小川氏の「共食の場」が実在したとして、その機能は一個の炉に集約されるべきものであろう。とすれば、＜複合単位形態＞の場合、「共同体の統合の象徴」たる建物の中に、中心となるべき「場」が複数存在しているわけである。逆に共同体内

の集団を分割することになりかねない。中心が分散するという意味では、〈非単位形態〉も同様である。」（P.163）という菅谷氏の指摘が妥当であるとすることはできない。

特に炉の数が複数であることから「集団の統合の中心が分散してしまうであろう」という指摘は的はずれと言わざるをえない。前稿において筆者は、大形住居がその内側に内包する空間全体を「場」として考えているのであって、炉そのものに集団の統合の象徴を求めるつもりはないし、そのように述べてもいない。むしろ聖山公園遺跡や、上ノ山遺跡、杉沢台遺跡のように、多数の大形住居が同時に存在した可能性のある場合のほうが問題であろう。

また、氏の「炉空間」の設定という鋭い指摘にもかかわらず存在する、炉や住居内空間に対する認識の低さは、以下に述べる住居内空間と「家族」に関する議論においても露呈されている。

2) 住居内空間と家族

確かに「住居の基本的な機能が、居住施設として人間を収容することであるのは言うまでもない」ことではあるが、「問題は、一つの住居に収容される複数の人間が個定的であるならば、住居を共有する人間は他に対してひとつのまとまりとしての性格を持つことにある。現在我々の考える「家族」と同一視できるか否かは別として、ひとつの住居にすまう人間は、景観上の集落を構成する最小単位の集団と見て間違いあるまい。先学諸氏の述べるように、こうした集団の統合の象徴を屋内の炉に見出すことができる。従って、炉空間を一単位のみ有する〈単純形態〉は、最小単位の一集団を収容する施設であると理解できる。」と続くことには異論がある。

一つの住居に収容される複数の人間が固定的かどうかは論証以前の問題であり、これを前提として住居を共有する人間が他に対してひとつのまとまりを持つと結論しているのであるから、この結論はやはり前提の範囲を越えることはない。

3) 真福寺例の評価

氏はこれまでの大形住居をめぐる議論が真福寺例をめぐる議論に触れていないことからその「学史的正確性」を欠くとする。各研究者が先験的であるかどうかは別にして、特殊と思われる例を対象としているのであるから、学史的に一辺約7mの2つの住居の切り合いであるとされた真福寺例が、検討の対象とされていないことは異とするには足るまい（塚田 1958, 1959）。もっとも塚田氏は真福寺例と並び大森勝山遺跡例についても「一戸だけ特別な機能をはたすものとして作られた」とされており（塚田 1969）、前稿において研究史をまとめた際にこれを見落としていたことは事実である。

4) 住居址出土遺物の評価

「遺物の出土量や質的な偏りから遺構の性格を論ずる事が無批判に行われる傾向にあるが、これは誤りである。遺構に対する遺物の廃棄は、遺構の機能と直接関連しない廃絶後に行われた行動である。出土遺物を遺構の機能と関連付け得るのは正しくはポンペイの如き状況においてのみ可能であり、それ以外では遺物は遺構の機能を考える糧にはならないと考えるべきである。」と述べられている。ご指摘の通りである。確かに、報告書や住居に関する研究の中には、出土遺物と遺構との

関係についての具体的記述を欠くものも見られ、前稿でも報告書などにおいて検討し得るものについては住居址床面直上の遺物をもって比較検討を行なっているが、これも安易であったと反省している。

ただ、遺物の廃棄が集落内の特定の部分になされることは土器捨て場の存在に見られるところであり、このことから逆に、一般の住居に比べ廃絶後の大形住居には土器の廃棄がわずかしに行われなかったという形での比較であれば、ここが「場」としてのなんらかの意識の内にあったと考えられるのではなかろうか。

5) 労働力をめぐって

最後に「堅果類の加工という季節的な限定を持った労働であるがゆえに必要な作業時間の効率化と、効率化のための準備としての作業所の建設とを一言で単純に比較できるものであろうか」との指摘に触れておきたい。

前稿で労働力の効率化について論じたのは、多大な労働力を集約させる社会的な要請の存在そのものを問題にしているのであって、労働力の多寡を単純に比較しようという意図はない。

堀越正行氏は、狩猟採集民がほとんど余剰の労働力や時間を持たなかったと考えるのは誤解であって、むしろ一日当たりわずか2～3時間の労働で自分も含めた非労働者をも養っていったであろうとの見解を示しておられ、現在の狩猟採集民に関する民族学的な研究もこうしたことを裏付けている（堀越 1984）。

4. 大形住居をめぐる諸空間の分析に向けて

ここまで述べて来たように、筆者は大形住居をめぐる議論を行なっていくにあたり、その規模から検討の対象を措定していく方針を立てた。その結果「単一もしくは複数の文化事象」としての「大形住居」の一部が一応設定しえたものと考えた。ここまでの手続き上の指摘はあるものの、これらを尊重しつつ敢えて議論を進めて行きたい。

前稿において見通しを述べておいたように、大形住居はその空間との関わりの中に位置付けていくことによって、これをめぐる集団のありかたをはじめ様々な論議を有効に進めていくことができるものと思われる。大形住居に限らず、考古資料の空間的分析は極めて多様であるが、主に(1)住居空間内、(2)集落空間内、(3)集団領域内、(4)日本列島における分布、の四点を中心に論ぜられることになる。

そのすべてにおいて十分な検討を行うことは筆者の手に余るところでもあり、とりあえず本稿では、(1)から(4)のそれぞれについての議論を概観し、今後なされるべき作業への一つの展望を試みることにする。

(1)の大形住居内の空間については、菅谷氏が特に積極的な見解を展開されている。すでに指摘したように、氏の「炉空間」から住居を分類し、その機能を想定するという手続きには論理展開上の錯誤が見られるとはいうものの、耳を傾けるべき点が多々ある。中でも炉や支柱穴を個々独立のも

のとしてその配列にのみ注目するに留まらず、住居内空間における障害物という側面に注目し、またそれらを有機的な繋がりを持った構成体として空間を区分する見方である。

ただこうした考え方ではこれらの住居空間内の物理的な区分とその単位は示しているが、それを機能上の区分に投影するところまでは至っていない。

大型住居の住居内空間の分割に関しては、先に述べたように武藤氏が住居内の小柱穴から間仕切り構造に言及したものがあるが、これにおいても個々の単位の機能的区分に関する具体的な議論は見られない。これに対し通常の住居のそれに関しては水野正好氏（水野 1969）、大林太良氏（大林 1971）、田中信氏（田中 1985）の論稿に代表される多くの研究が知られる。これらにおいては民族誌的資料、遺物の出土状況などからその象徴的側面にいたるまでの検討がなされている。大型住居においては入口部の位置、炉の位置、出土遺物の少ないことなど、そのまま比較することは困難であるが、その機能の問題に関する一つの側面として今後の課題となろう。

一つの広がりとしての住居址内の空間に関する議論において、炉の位置や数とともに重要な要素となっている柱穴の配置に関する議論を見ると、その配置から重複の回数や、拡張、縮小を求める作業と武藤氏をはじめ菅谷氏のように、これを炉と積極的に結び付けて考える見方とがある。前者においては、基本的に柱穴が安定した形で配列されていることが前提とされているようであるし、後者においては炉を中心とするように柱穴が配置されていることになっている。しかし、主柱穴の配置はむしろ幾何学的に整ったものとはいえない。このことは大型住居に限らず「通常」の住居にも見られるところであるが、これに対しては渋谷文雄氏のように柱穴の接線に注目し、上屋構造の復元を行なうという考え方がある（渋谷 1982）。この考え方を参考にすると、大型住居の柱穴配置の多くは比較的整った上屋構造を推定し得るが、これを用いて住居の類別が可能となる。大型住居の類別の一つの試みとして後に示すことにする。

(2)の集落空間内の分析に関してはまず第一にその占地の問題が挙げられるが、それも単に集落内の特定の部位に多く見られるといった問題だけでなく、他の「通常」の住居址や、貯蔵穴、柄鏡型住居のような特異な機能の想定される遺構との相対的位置関係が問題にされよう。

このほか、集落空間が区分されることから社会組織の形態に論を及ぼした大林氏、水野氏をはじめとする集落空間の分割構造論において、大型住居がいかに関位置付けられるのかという問題は、社会組織のありかたとの関係という点からも注目されよう。

(3)の「領域」に関しては、特に詳細な議論が必要となろう。なぜなら、前稿において述べたように「共食」の場として大型住居を見たとき、その儀礼に参加するメンバーの構成や、それぞれの帰属する集団における位置など、集団と空間の一つの接点としての大型住居の位置付けに最も深く関わる側面として重要であると思われるのである。

「領域」という語は、一般に人間およびその集団の活動もしくは勢力の及ぶ範囲であるが、縄文時代の「領域」は、個々の研究者の方法論や関心に応じる形で広狭さまざまなレベルで設定され、多様な用い方がなされており、現在のところ何ら規定がないといえる。これらはまた当然の事なが

ら、それぞれのレベルでの領域を占有し、あるいは利用する「集団」やその集合体の捉え方とも関わっている。

「領域」に関するこうした多様な議論には、主として集落を中心としてその外延に広がる空間として設定されるものと、土器型式の分布圏をはじめとする遺物に見られる地域性から設定されるものとの二者が認められる。

前者は生活の拠点としての集落を包摂する多様な空間であり、主に集落論の一環として論じられてきているが、向坂鋼二氏はこうした様々なレベルでの領域を、集団との関わりの中で論じていく具体的な方法を呈示している（向坂 1970）。向坂の示した各領域を、これまでの領域論との関わりの中で整理すると以下のようなよう。

向坂氏は集落を構成する人々をひとまず最小単位の共同体と考え、その単位となる集団が食物や燃料、道具の素材など、生活に必要な品々を日常的に得ていたと考えられる空間（以下「生活領域」と呼ぶ）を最小単位の「生活圏」と呼んだ。そして集落址自身の内部が時間的空間的に分割し得ることをも示している。集落址を構成する住居址をいくつかの群に分ける方向での分析は数多くあり、そこに双分組織、三分組織といった社会組織の反映を見る見方が集落の「分割構造論」として論じられて来ているが、これを「領域」に投影する試みは見られないようである。

続けて向坂氏は「集落の日常における生活領域（テリトリー）」を求める方法として水野正好氏（水野 1969）および高橋護氏（高橋 1965）の検討を挙げ、「遺跡を群としてとらえるのでなければ、領域の問題は解決し得ないとする立場」であるとし、向坂氏自身遠江平野部、同山岳部の大井川流域、さらに西遠地区の弥生時代遺跡群について検討を行なっている。これらの三者においては、地図上で群として捉えられた複数の遺跡は単一の集団の移動の結果残されたものであり、その空間的広がりとは特定の集団のもつ領域を示しているということになるが、以下こうした単一の集団の移動の範囲を一応「集団領域」と呼んでおく。

高橋氏においてはその規模に関しての具体的な記載を欠くが、水野氏の想定した集団領域は南北 2.5 km、東西 1.2～1.6 km、面積 3～4 km² である。また向坂氏における縄文期の例では半径約 3 km の圏内に収まるとされているが、このうち遠江平野部の例については「実際には複雑な形の領域として、他群の領域から峻別されていたものと想像できる」とし、その面積をほぼ 30～40 km² と推定している（p. 272）。同様の手続きによって一つの集団の持つ領域（「集団領域」）を想定した例として、戸沢充則氏の市川市における例（戸沢 1971）や、堀越正行氏の千葉市における例（堀越 1972）があり、それぞれ直径 2～3 km の円圏によって遺跡群の広がりが示されている。

面積としてさらに広い範囲の「集団領域」を想定したものに、清水芳裕氏の中国地方日本海沿岸部および瀬戸内沿岸部における例がある（清水 1973）。清水氏は土器胎土の顕微鏡観察により、そこに含まれる鉱物岩石の特徴に一定の分布圏を考え、それを特定の集団の移動範囲と考えている。これは手法としてはむしろ後に述べる土器型式の分布圏から特定の集団を考える方法に近いが、その分布圏そのものは集団領域と見なされている点が注目される。

これらが一つの集団領域を、それぞれ一つの単位集団が占有するような形で設定しているのに対し、石井寛氏は港北ニュータウンにおける精緻なデータに基づく同様の手続きに、住居の廃棄・再構築に関わる新たな見解を導入して、より広い地域を複数の単位集団が入り乱れることなく移動を繰り返していたものとの想定を行なった（石井 1977）。

さて、これまで論ぜられてきた「生活領域」と「集団領域」とはどのような関係にあったと考えられているであろうか。

向坂氏はこれについて「生活圏を、日常の生活が及ぶ範囲だただけ解釈すれば、領域（テリトリー）とほぼ同義になる」（向坂 1970 p. 258）、「共同体の日常的生活圏、つまりその領域＝テリトリー」（向坂 1976 p. 59）と述べており、この両者はほぼ同一のものとして扱われている。

林謙作氏も仙台湾沿岸地域を中心としてその遺跡の分布を自然環境との関わりから群としてとらえ、直径60km位の広い範囲を「集団領域」としているが、その際やはり「生活圏」と「集団領域」の両者は区別されていない（林 1974, 1975）。またその後の論考においても、この両者はそれぞれ高次および低次の作業概念もしくは分析概念とされ、基本的に同一の対象として扱われている（林 1979）。

これに対し、先に見た高橋氏は「…生活圏と言いますか、集落の周辺に独占的な狩猟、漁撈区域という物をもっていたであろう…」とし、「少なくとも一つの集団がかなりの独占的な狩猟、漁撈圏をもって移動しますと…」（高橋 1965）と述べており、また石井寛氏はこの生活圏に当たるものに「生活単位領域」という語を与え、「個々の集団は移動時には別の後背地を有する、別の「生活単位領域」へと居住地を変更するわけである」（石井 1977）と述べて、生活領域を集団領域の一部として位置付けている。

向坂氏や林氏において、この両者が峻別されていないのは、それなりの領域観に基づくものではあるが、一つの集落を生活の拠点とする集団の成員が、その日常生活に必要な食料や燃料、道具の素材を求めて行動する空間である「生活領域」となんらかの理由によって集落が移動していく空間である「集団領域」とはもとより一致するとは考えられない。「集団領域」に対する言及がなされなくとも、多くの場合「生活領域」は集落との関わりの上で意識されてきている。

この空間について宮坂英弐氏は「生活物資が豊富に供給される資源地区」（宮坂 1946）、小林達雄氏は「日々の食料資源の確保に関わる生活領域」（小林 1986）といった形で言及しているが、これらはむしろ漠然とその存在を表現したものである。

これに対して市原寿文氏は縄文時代の共同体を考察していく上で、大井川流域における集落の分布を検討している。そこでは同様の立地条件をもって遺跡が約10 km もしくはそれ以上離れて流域沿いに点々と分布しているとして、個々の集落が生活領域を保有していたとの想定を行なっている（市原 1959）。セツルメント・パターンを考慮しつつ同様の手続きを行なったものに、広瀬昭弘氏らや、宮崎博氏によるものがある（広瀬ほか 1985、宮崎 1987）。

こうした集落と生活領域の関係について林謙作氏は「集落」という語とともに、その研究上の多

様な問題点を指摘している（林 1979）。その際林氏は先に述べたように「生活領域」と「集団領域」とを峻別しておらず、そのためいささか各領域論に関する評価に混乱を示していると思われる部分もあるが、「集落」および「領域」研究への一つの立場を示している。ここで林氏は「集落」と「領域」の2つの語は「現実中存在する経験的な現象を記述する便宜のために設定された」概念であるとし、「遺構の集合体」もしくは「諸施設の複合体」たる「集落」に対応する「“人工的景観”としての集落をとりまく自然」であるところの「領域」はありえず、「自然もしくはその一部に対して人間の所有もしくは占有関係が成立したとき、言い換えれば人間が自然を労働の対象物とするかぎり、領域という概念は成立する。」そしてこの領域に対応する「人間生活の拠点を意味する概念」を「ムラ」と呼ぶことを提唱している。そしてこの〈ムラ—（集団）領域〉の関係は、さらに「複数のムラの間関係をとらえることによりムラはさらに“村落”となり、集団領域は“生活圏”の次元にまで高められる」というプロセスをもって〈村落—生活圏〉の関係に至るとしている（林 1979）。

これらにおいて、「生活領域」は常に集落と集落との位置関係により定められるものであったが、赤沢威氏は一つの集落を中心とする生態学的アプローチを行ない、その際「遺跡テリトリー」の概念を導入している。赤沢氏は「遺跡テリトリーはその遺跡に居住していた集団が日常的に食料など各種資源を調達していた領域であり、それは明確に閉じた系を意味している」として、Lee の !Kung Bushman における民俗誌的データから、遺跡を中心に半径約10km を遺跡テリトリーとして前提している（赤沢 1983）。ここでの遺跡テリトリーはこれまでの論考と異なり、集落の生活領域を指定するということよりもむしろ、集落の生態学的位置づけを目的としたものであり、生活領域は、研究の結果明らかにされるものであると考えられている。

以上、「領域」と呼ばれる集落をとりまく空間に関する問題について、その分析の手法の面から概観してきた。それは「集落 \subset 生活領域 \subset 集団領域」という包摂関係をもった諸空間として捉えられ得るものであった。次に、これをさらに大きく包摂するような空間を見る前に、生活領域もしくは集団領域を共有する複数の集団についての論考に触れておかなければならない。

まず、向坂氏は「地理的景観としては一つの生活領域にふさわしい小区域に、いくつかの遺跡集落跡が、景観的に相互に独立して存在する場合がある。この場合には、これらの遺跡群によって示される集落群が領域を共有したこともあり得る。」と述べ、複数の集落群の統合体の可能性も指摘している（向坂 1970）。

また先に述べたように石井寛氏も、一つの集団領域の中に複数の集団が移動を繰り返していたと見る。そしてその際、複数の集団が全体で組織的に「集団領域」を管轄していたと考えており、これらの集団が一つの統合として機能していたとの考えを示し、「地域的な集団関係」の存在を指摘している（石井 1972）。

このほか、和島誠一、岡本勇の両氏は南堀貝塚の調査において「鶴見川入江」の遺跡を群として扱った上で、「社会的に孤立した集落というものが存立しえない以上、それらの集落は相互に有機

的な関連をもっていたと考えられる。」と述べ（和島、岡本 1958）、また堀越正行氏も千葉市域を中心とした東京湾沿岸の遺跡群の検討から複数の集団によって海や海岸が共有された「共同組織」の存在を指摘している（堀越 1972）。

このように、同一の集団領域や生活領域を複数の集団が共有していたり、あるいは複数の集団が地理的に近接して存在し、相互に関係を保っていたと考える時、それらの集団の存在の同時性の認定が要求される。その際、今までのところもっとも有効かつほとんど唯一の手段として用いられているのが、土器に見られる「型式」である。即ち同一の型式の土器を持つ複数の集団は同一時期に存在していたと考えるのである。しかしこうしたいわば時間の物差としての役割が型式に与えられると同時にまた同一の型式を持つ複数の集団を今度は、同一の型式を共有するという点から、なんらかの関係を有する集団の集合体あるいは集団そのものとする見方が可能となり、同一型式の土器の分布をもって、単一もしくは複数の集団の集合体の領域とする見方がでてくる。さらに同一の土器型式を空間的拡がりの中に位置づけるだけでなく、連続する型式を継続して持つ遺跡における文化伝統の連続性をも指摘され得る。

向坂氏は、この両者を統合した形でとらえ、一つの土器型式の分布圏に相当する小さい地域圏および空間的にも時間的にも拡がる「同系統と認むべきいくつかの型式群」の分布によって示される大きい地域圏の二種の地域圏が設定しうることを縄文時代前期後葉から弥生時代後期における中部地方の土器型式の変遷から詳論している（向坂 1970）。

後藤和民氏は向坂氏の「集落—生活圏—集団領域—小さい地域圏（広域圏）—大きい地域圏」と重層的に拡がる領域の概念に自らの解釈を加えて模式図を示している（後藤 1982）。

向坂氏の地域圏は大小二つの段階で、土器型式および土器型式群の分布圏にほぼ相当する形で設定されたものであったが、小林達雄氏は基本的には土器様式の分布圏の境界線のありかたからこれを大地帯、中地帯、核地帯の三つの次元で設定し、ここから縄文時代における領域に大領域、中領域、核領域という三つの次元での領域を想定している。そして核領域の中に「核単位集団が食料調達などの行動を展開する生活領域」としての小地区が存在した可能性を指摘しつつも、核領域を縄文時代の基本的な単位として位置付け、「通常の行動は核領域内で自己完結し」、「核領域のクニ境を越えて協業を予想していない。」と述べ、「核領域がその枠を越えて…中領域、大領域との関係を結ぶのは、具体的な日常の行動、即ち所謂ケの世界においては、観念の世界ハレで紐帯が維持されるのではないか」としている（小林 1983）。

これら、土器型式や様式の分布圏から集団のなんらかの領域を考える方向は、古くは鳥居龍造氏の「土器型式部族説」においてすでに、厚手式、薄手式の土器型式の差を部族（分派）の差と考え、その分布の違いを部族の居住地域とその生活様式の差に求めた例にも見られるが、その後も、「型式aはそこで生まれ、土器を作り、用い、死んだところの人間の集団を意味する」（芹沢 1958）という語に代表されるような、土器型式が直接集団そのものを表すとみなし、その分布圏を特定の集団の文化圏とみなす考え方が広く行なわれ、その是非も論ぜられている。

こうした中で谷口康浩氏は土器型式と集団との関係を積極的に扱い、特に「型式はなにゆえ一定の地理的広がりをもつのか」という設問に答える形で、縄文時代の親族組織に論を進めている（谷口 1986）。

先に述べたように、集団の統合を強める儀礼としての「共食」の場として大形住居を考えた時、その集団と、遺跡としての集落をどのように評価すべきか、また土器形式や土器様式の空間的分布や時間的変遷などにかかるこの集団と他の集団との相互の関係など、「領域」という形で論ぜられてきたさまざまな問題が重要な意味を持ってくることになる。

(4)の日本列島内における分布に関しては、渡辺誠氏による多雪地帯との重複という重要な指摘の後、多くの研究者がこれを根拠として、大形住居の機能に言及してはいるが、次第にこれまでより広い範囲でその存在が確認されて来っており、縄文時代の気象の状態と現在のそれとが等しいといえないとはいえず、必ずしも多雪地帯をもって説明し得ると思われえない。むしろ、先述の小林達雄氏の言う広義の「領域」（小林 1983）との関係や、東日本と西日本との間に見られる文化事象の対照的なあり方など、分布圏そのものの問題として検討していく必要がある。

5. 大形住居のさらなる検討に向けて

最後に今後の検討に向けて、(1)の住居空間内の様相から大形住居を類別することによって、その類別そのものの機能上の“意味”を考えることにしたい。

これまでに述べてきた点を考慮に入れつつ、大形住居の柱穴配置を以下のように分類した。

① 主軸の左右に対称に並ぶもの（梯子状）

- イ 主軸上に主柱穴のあるもの
- ロ 主軸上に柱穴のないもの

② 主軸の左右に交互に並ぶもの（鋸歯状）

③ 円弧状に並ぶもの

④ 規則的な配置の認められないもの

⑤ 明瞭な主柱穴の見出されないもの

上屋構造を考えれば当然のことながら柱穴配置は平面形に強く規定されるものであろう。しかしこの平面形は、遺構の保存状態や調査時の精度等によって変動しやすいと思われる。したがって遺構の「かたち」という側面は、ひとまず柱穴をもって分類しておきたい。

次に炉について見れば、その数と配置から以下のように分類される。

a 炉の見出されないもの

b 1基のみあるもの

c 複数あるもの

- イ 主軸上に配置されるもの
- ロ 主軸を離れて配置されるもの

炉の配置については中村氏の分類（中村 1982）を参考にした。なお炉の形態に関しては、時期的な変化という側面が大きいので、これを分類の基準としては考えなかった。また、いわゆる地床炉は石囲い炉などに比べ明確な施設としては認識され得ないものも多く、単なる焼土の集積したものとの区別が困難なものもあるが、報告の記載などから判断した。

このほか、重複、拡張縮小、周溝、ベッド状施設などの特徴についても一応分類の基準から除外しておく。

まず柱穴配置と炉の配置との対応関係について整理すると、①—cイ、③—bの二つのグループが得られる。すなわち中村氏の分類による「長方形大形住居址」と「円形大形住居址」である。

次にそのおのおのの時期的なありかたを見ると、前者がほぼ前期～中期中葉、後者が中期末～晩期に位置付けられるが、中村氏はこの両者を「建物の構造上、あるいは炉址などから同一には扱えないであろうし、時期的にも中期末葉を境としている。」（P.135）として、相互に独立したものとされているようである。

これらの結果を、単一もしくは複数の文化事象としての大形住居の位置づけという側面から見るためには、この各々のグループが時間的に継起して現われる同一の事象であるのか、あるいは独立した複数の事象であるのかについて検討して見る必要がある。（前稿においてはこの手続きを怠って単一の事象としてその機能にまで言及したため、すでに見たような菅谷氏の指摘を受けることとなった訳である。）

柱穴配置と炉の配置との間には、例えば①とcイが「細長い平面形」を媒介にしてほぼ対応することが考えられるように全く独立したものとはいえないが、例外的なものが存在することに注目する。

もちろん、ここで注意しておかねばならないことは、こうした形で得られたグループが、それぞれ、あるいはそのいくつかが特定の文化事象として区分されるかどうかについても、今後の検討課題であるということである。つまり、上で試みたような分類が、文化事象を区分する基準であり得るかどうかという問題であり、さらに言えば、形態などの属性が、機能を一対一に示し得るかどうかという問題である。

む す び

以上、前稿以後に発表された大形住居に関する議論や前稿に対する指摘の概観を中心に論じ、さらに大形住居の類別とそれが持つ機能上の区分との関係についても考察した。

なんらかの遺構や遺物の機能を、居住のような生活において基礎的とも言える要素として解釈することは容易と言えるかもしれないが、これを越えた機能の問題に踏み込んでいくことは難しい。しかし、逆にこうした試みをその困難さのゆえに回避していくことは、機能に関する解釈を不可欠な要素のいずれかに押し込んでしまうことになるだろう。

用語用字の問題としてだけでなく、「形態」「型式」などを機能とどのように関連させ、定義づ

けて行くのか、さらに何を前提とし、何を論証して行こうというのかといった議論の展開にも、これを論じる者の持つイメージといったものが反映され、その結果として菅谷氏の論ずるように大形住居をめぐる議論が混乱を極めるようになったものと思われる。しかし筆者はこの「混乱」を決して悪しきこととは思わない。むしろ能動的な応酬による議論の活性化を期待するものである。

本稿はその内容から「(続その1)」あるいは「(その2)に向けてのノート」とでもするべきものであろうが、ひとまずこのような形として後考を期するものである。

本文中にていくつかの見通しを示しておいたが、今後なされるべきことは多々ありさらに多くの方向から大形住居が論じられて行くことになるだろう。

本稿は菅谷氏の批判に答える形で書きはじめたものであるが、氏の批判や議論は縄文時代の大形住居のみならず、住居、集落、領域、さらには文化や社会について論じる上でも多くの良き刺激を与えるものであった。氏に対してここに感謝しておきたい。

なお、本稿ではできる限り論者のいうところをそのまま引用して検討を加えて来たつもりであるが、誤解や理解の不十分なところも多々あろうかと思われる。また、いささか筆の走り過ぎたきらいはあるが、他意はない。御寛恕を乞うとともに氏の再批判を待つところ大である。(未完)

引用参考文献

- 赤沢 威 1983 『採集狩猟民の考古学』海鳴社
- 秋本信夫 1984 『天戸森遺跡発掘調査報告書』鹿角市教育委員会
- 石井 寛 1977 「縄文時代における集団移動と地域組織」『調査研究集録』2
- 1982 「継続と移動」『縄文文化の研究 8 社会・文化』雄山閣
- 市原寿文 1959 「縄文時代の共同体をめぐる」『考古学研究』6-1
- 大林太良 1971 「縄文時代の社会組織」『季刊人類学』2-2
- 1975 「住居の民族学的研究」『家』社会思想社
- 小川 望 1985 「縄文時代の「大形住居」について(その1)―その定義と機能をめぐる若干の考察―」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第4号
- 後藤和民 1982 「縄文集落の概念」『縄文文化の研究 8 社会・文化』雄山閣
- 小林達雄 1983 「縄文時代領域論」『坂本太郎博士頌寿記念 日本史学論集』上巻
- 1986 「原始集落」『岩波講座 日本考古学』4 岩波書店
- 桜田 隆 1988 『上ノ山遺跡』秋田県埋蔵文化財センター
- 清水芳裕 1973 「縄文時代の集団領域について―土器の顕微鏡観察から―」『考古学研究』19-4
- 菅谷通保 1985 「竪穴住居の型式学的研究―縄文時代後・晩期の諸問題」『奈和』第23号
- 1987 「縄文時代特殊住居論批判―「大形住居」研究の展開のために―」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第6号
- 芹沢長介 1958 「縄文土器―縄文土器の概念と型式―」『世界陶磁全集』1 河出書房
- 高橋文夫 1980 『松尾村長者屋敷遺跡(Ⅰ)』岩手県埋蔵文化財センター
- 1982 「大型住居址における一重複例―富山県朝日町不動堂遺跡の第2号住居跡を中心に―」『紀要』Ⅱ 岩手県埋蔵文化財センター
- 高橋 護 1965 「縄文時代における集落分布について」『考古学研究』12-1
- 高橋与右エ門 1983 『上里遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター
- 田中 信 1985 「住居空間分割に関する一試論」『土曜考古』10

縄文時代の大形住居について（その2）

- 谷口康浩 1986 「縄文時代の親族組織と集団表象としての土器型式」『考古学雑誌』72—2
- 塚田 光 1956 『縄文時代堅穴住居の研究』（『縄文時代の基礎研究』1982所収）
- 1959 「真福寺の巨大な住居址の再検討」『考古学手帖』8
- 1969 「縄文時代の共同体」『歴史教育』14—3
- 戸沢充則 1971 「貝塚文化—縄文時代」『市川市史』1
- 中村良幸 1982 「大形住居」『縄文文化の研究 8 社会・文化』雄山閣
- 長崎元広 1980 「縄文集落研究の系譜と展望」『駿台史学』50
- 林 謙作 1974 「縄文期の集団領域」『考古学研究』20—4
- 1975 「縄文期の集団領域＝補論」『考古学研究』21—3
- 1979 「縄文期の集落と領域」『日本考古学を学ぶ』(3)有斐閣
- 広瀬昭弘・秋山道生・砂田佳弘・山崎和巳
- 1985 「縄文時代集落の研究—野川流域の中期を中心として—」『東京考古』3
- 堀越正行 1972 「縄文時代の集落と共同組織—東京湾岸地域を例として—」『駿台史学』31
- 1984 「縄文時代における剰余労働・時間の行方」『奈和—15周年記念論文集—』奈和同人会
- 三浦謙一・佐々木勝
- 1985 「縄文時代前・中期の住居址群の変遷—松尾村長者屋敷遺跡の分析—」
『紀要』V（財）岩手県埋蔵文化財センター
- 水野正好 1969 「縄文時代集落復元への基礎的操作」『古代文化』21—3・4
- 宮坂英弼 1946 「尖石先史聚落址の研究」『諏訪史談会報』3
- 宮崎 博 1987 「土地と縄文人」『物質文化』47
- 向坂鋼二 1970 「原始時代郷土の生活圏」『郷土史研究講座』1
- 武藤康弘 1985 「縄文集落研究の動向」『民俗建築』第89号
- 梁木 誠 1988 『聖山公園遺跡Ⅴ—根古谷台遺跡発掘調査概要』宇都宮市教育委員会

Ogata-jukyo (Large-scale Houses) of the Jomon Period (II)

—More about their definition and function—

Nozomu Ogawa

In my first paper I dealt with the definition and function of the so-called 'large-scale houses' (*Ogata-jukyo*) of the Jomon period. My approach was to begin by distinguishing the dwellings by size alone, and then to proceed to considerations of their character. As a result, I hypothesized that the buildings functioned as a communal dining place for ritual feasts held by the members of certain social groups in order to strengthen group unity.

In reaction to this theory some opinions have been put forward by M. Sugaya and others. This present paper is written as an answer to these criticisms, particularly those of Sugaya, as well as to provide a prospectus for further analysis and consideration.

Sugaya is of the opinion that previous arguments about *Ogata-jukyo* have taken a basically wrong course. In analysing all types of houses, Sugaya presented the idea of 'hearth space' (*ro-kukan*), meaning the area around a fire place surrounded by post holes. Applying this concept, he attempted to classify houses into three categories: single-unit type, multi-unit type and null-unit type. Multi-units were used for multiple dwellings and null-units were used for some other purpose because most ordinary houses have only one hearth space.

In the present article I point out that Sugaya's theory of hearth-space is wholly dependent on the as yet unproved premise that ordinary 'houses' were for dwelling use only. After reference to Sugaya's other criticisms, I review opinions on classification and function by other archaeologists, and finally present a perspective for the spatial analysis of *Ogata-jukyo* using a classification based on the layout of post holes and hearths.